

〔博士論文概要〕

テニスのグラウンドストロークにおける個人戦術とその指導に関する実践知

令和元年度

北崎 悦子

筑波大学大学院人間総合科学研究科コーチング学専攻

テニスにおいて基礎的な打球技術の 1 つであるグラウンドストロークは、テニスの試合に勝利するために、ラリーの攻防を制する重要な役割を担っている。また、これらのショットの組み合わせは、実践の場ではショットのコンビネーションと言われ、ポイントの獲得に大きく影響している。

国際レベルで活躍した選手はショットのコンビネーションを実践知として体系化し、それをゲームの「流れ」の中で戦略的に用いている。国際レベルで活躍した選手がどのようなショットのコンビネーションを、どのような状況でどのように相手と駆け引きしながら使おうとしているのか、つまりテニスのラリーの攻防における個人戦術力の実相を明らかにすることは、実践の戦術指導に有益な知見をもたらすと考えられる。

上述したショットのコンビネーションに関する指導は、選手との関わり合いの中で、指導者自身が自覚することなく、暗黙的に行われる活動であることも多く、そこでは指導者の思考・決断過程を含めたコーチング活動に関する実践知が働いていると考えられる。

しかし、日本において国際レベルで活躍したトップ選手や、トップ選手を複数輩出したトップ指導者が多数存在しているにもかかわらず、テニス選手にどのようなグラウンドストロークの個人戦術力を、どのように修得させれば、ラリーの攻防を制してゲームに勝利する能力を養成することができるのかという戦術指導に関する知見は少なく、その実践知は個々の経験の中に埋もれたまま明らかになっていない。このことから、指導者間においてグラウンドストロークの指導に関する意見交換を行うための情報が共有されず、指導者個人の経験に基づく指導に任せられ、さまざまな競技レベルのテニス選手に対して合理的な指導ができていないことが考えられる。

本研究では、以下の 2 つの課題を解決することによって、テニスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションの個人戦術力およびその指導に関する実践知の実相を明らかにし、個人戦術力の向上に役立つ知見をコーチングの実践現場に提示することを目的とした。

研究課題 I：日本のトップ選手におけるグラウンドストロークのショットのコンビネー

ションに関する実践知を明らかにすること

研究課題Ⅱ：日本のトップ選手を育てた指導者におけるグラウンドストロークのショットのコンビネーションの指導に関する実践知を明らかにすること

(1) 日本のトップ選手におけるグラウンドストロークのショットのコンビネーションに関する実践知（第2章）

第2章では、一流選手の持つテニスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションに関する実践知を公共的に提示することで、グラウンドストロークにおけるラリーの個人戦術力の実相を明らかにすることが目的であった。この目的を達成するために、国際レベルで活躍した経験を持つ4名の女子テニスプレーヤーを対象にインタビュー調査を行い、その語りを質的に分析した。その結果、以下の3つの知見が得られた。

- 1) 日本のトップ選手は、グラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションにおいて、相手の行為に対応して自分の行為を決定しようとする行動戦略志向と、自分が事前に決めていた行為ができるように、自分の行為を相手に対応させようとする行動戦略志向の2つのタイプが存在する可能性が示された。
- 2) グラウンドストロークの準備局面におけるボールへの入り方がラリーの優位性、すなわち攻めのストロークを打てるのか、守りのストロークを打たざるを得ないのかを決定する要因の一つであることが示された。
- 3) グラウンドストロークのコースをストレートかクロスに打ち分ける方法は、ストレートとクロスのどちらのコースへも打てるフォームでボールへ入り、打つ前のタイミングの変化を用いていることが示された。

(2) 日本のトップ指導者におけるグラウンドストロークのショットのコンビネーションに関する指導の実践知（第3章）

第3章では、国際レベルで活躍した選手を指導した指導者が持つテニスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションの指導に関する実践知を公共的に提示し、指導者の戦術指導の向上に役立つ知見を実践現場に提供することが目的であった。この目的を達成するために、国際レベルで活躍した女子テニスプレーヤーを指導した経験を持つ指導者4名を対象にインタビュー調査を行い、その語りを質的に分析した。その結果、以下の5つの知見が得られた。

- 1) 日本のトップ指導者は、選手の「動き」ではなく「相手との駆け引き」を潜在的に代行することによって、選手自身がゲーム状況に応じたショットのコンビネーションができるかどうかを査定し、ショットを自在に変化させられる個人戦術力を有しているかを評価している。

- 2) 戦術的思考力の指導では、選手にゲーム状況を認知させるために選択的に注意すべき情報を具体的に提示する場合と、それらの情報を選手自身に見つけさせようとする場合が存在する可能性がある。
- 3) ゲーム状況の認知と予測に関しては、①状況を生み出させる条件を設定し、遂行するプレーの決定に関しては選手自身に編み出させる場合と、②ゲーム状況の認知と予測およびプレーの決定に関しては選手自身に見つけ出させる場合と、③ゲーム状況の認知と予測に関してはヒントを与えるものの、遂行するプレーの決定に関しては、選手自身に編み出させる場合が存在する可能性がある。指導の場では、戦術的思考力を、選手の自得に任せるのではなく、選手の運動感覚を観察しながらサポートしようとしている。
- 4) 技術力の指導では、①選手に修得させたいショットのコンビネーションをひとまとまりのメロディーとして感じさせ、その中でストローク動作のコツを習得させようとしている。②練習環境を設定し、選手にコツやカンを自得させようとしている。③自分よりもパワーの優る男子選手とのゲーム形式の練習と、条件を一定に設定しないドリル形式の練習を採用し、カンを顕在化させ、身につけさせたい動きのコツを前意識的に働かせることを通して、選手に技術力を自得させようとしている。それに加えて、習得させたい攻撃的なストローク技術のカンを顕在化させることによって、守備的な状況に対応できるストローク技術も同時に習得させようとしている。
- 5) ショットのコンビネーションの達成力を高めるために、さまざまなショットを同時並行的に習得させるのではなく、習得すべきショットの優先順位を明確にしている。

以上の結果から、日本のトップ指導者は選手に対して、動作の習得に必要なコツの指導ではなく、動作を遂行する際のカンを提示することでコツの発生を促すトレーニングを処方していることが明らかになった。また、そのトレーニングにおいて、指導者は選手の主体的なプレーを促しながら、そのプレーの方向性を見失わせないように、プレーの決定に関するカンを暗示していることが明らかになった。

研究課題Ⅰから日本のトップ選手におけるグラウンドストロークのショットのコンビネーションに関する実践知が、また研究課題Ⅱから日本のトップ指導者におけるグラウンドストロークのショットのコンビネーションに関する指導の実践知がそれぞれ明らかとなり、さまざまな競技レベルのテニス選手における合理的な戦術指導に関する有用な知見を得ることができた。